

文化の捉え方・文化への接し方

中林 広一

本センターでは昨年度まで研究班として「東アジアにおける東西文明の出会い或いは衝突」が組織されていたが、筆者もその共同研究に加わることで文化と接点を持つ研究を行う機会に恵まれた。その際、研究に取り組んでみてまず感じたのは文化を取り扱うことの難しさである。

「文化」はこれほど人口に膾炙した語であるにもかかわらず、それが示す内容はもとより、その扱われ方も実に多様である。一人一人が思い描く文化の姿は似通いつつも、相似形であるわけではないし、文化との距離感も一人一人異なっている。文化というものが持つ性質・特徴にどこまで迫った把握を行うのか、個々の研究者のレベルでも異なるが、また研究分野によっても温度差が存する。

しかし、厄介なことに、人々は同じ「文化」という語を口にし、無自覚の内に同じ概念として共有しているかのようなイメージを抱いている。実際には捉え方・接し方に大きな差異が横たわっているにもかかわらず、である。気づかぬ内に生じているミスマッチに絡めとられつつも、同じ相貌を持つものとして「文化」が認識されている状況は、決して好ましいものであるとは言えない。試みにいくつかの研究分野を採り上げつつ、文化の扱われ方を確認してみよう。

さて、文化人類学は「文化」の名を冠しているだけあって、文化をどのように捉え、文化とどのように接するのか、そのような課題に対してこれまで正面から向き合ってきた歴史を有している。とりわけ、文化の捉え方という点で言うと、1980年代以降議論が積み重ねられてきたポストモダン人類学に言及しないわけにはいかない。

ジェイムズ・クリフォードやジョージ・マーカスなどに代表されるポストモダン人類学によって提示された論点は多岐にわたるが、その一つには「真正な文化」・「本来の文化」といった枠組みに対する懐疑的な問いかけがある¹。研究の対象となる文化に対して調査者が消滅の危険性を感じ取り、それが失われる前にその姿を民族誌に記しておく、そのようにして姿を消しつつある「真正な文化」・「本来の文化」の保護を使命とする態度が人類学、特に植民地あるいは旧植民地を対象とした人類学には存したが、ポストモダン人類学はこうしたコロニアル人類学に対して厳しい批判を突きつける。

その批判を余すことなく紹介するには紙幅が足りず、またそれは本稿の目的でもないためここでは避ける。ただ、文化を部分的に切り取り、切り取られたものを伝統的で変わることのない真の文化として提示するその姿勢を問題としたこと、換言すればポストモダン人類学はいわゆる本質主義に対する批判者としての位置づけが強いことを強調しておきたい。というのも、こうした立ち位置は、ポストモダン人類学が文化に生じる変化や外部にある文化との間で生じる相互作用といった現象にも目を向け、可変的な性格を備えたものとして文化を捉えていることも意味するからである。

ここに文化人類学の文化に対する捉え方の一端を窺うことができるが、それでは他の研究分野において文化はどのように捉えられ、どのように扱われているのか。差し当たり、筆者の専門分野でもある中国史における状況について考えてみよう。

歴史学において文化は文化史という括りの中で扱われることが多く、中国史の分野においてもそのタイトルに「文化史」を冠した研究書や一般書は数多く存する。ただ、これらの研究における文化の捉え

1 ジェイムズ・クリフォード、ジョージ・マーカス編『文化を書く』（紀伊国屋書店、1996）、ジェイムズ・クリフォード『文化の窮状』（人文書院、2003）。

方はポストモダン文化人類学におけるそれとは大きく様相を異にする。

すなわち、研究のあり方としては個別の文化的事象に関する事実の確定に終始することが多く、文化の可変的な姿を示すことはあっても、大抵は詩文・絵画・音楽など特定のジャンルにおいて長いスパンの中で生じる変化を提示するに過ぎない。個々の事象に生じる変化や個々のジャンルに生じる異種混淆性に触れた研究は決して多くないし、そのような数少ない研究さえもその議論は変化・混淆の指摘にとどまっている。当然、それを事例としつつ文化が持つ性質を読み取るところまで踏み込んだ論考は皆無に等しい²。

あるいは中国史の概説書の類で文化がどのように扱われているかを考えてみてもよからう。それぞれの時代において詩文・絵画・音楽にどのような作品があったか、どのような時代背景・社会状況の下でそうした作品が生まれたかが論じられても、個々の文化的事象に生じるダイナミックな動きにまで触れられることはない。

以上の状況について、あえて単純化した形で対比を行うならば、文化人類学における文化の捉え方が動的であり、外部的な要素との有機的な関連性も意識されている一方、中国文化史におけるそれは静的であり、事実の羅列に終始していると言い表せようか。それは、文化人類学が個々の文化的事象に生じる変化を丹念に読み解こうとしているのに対し、中国文化史においてはいくつかの文化的事象を時系列に沿って並べ、つなぎ合わせ、そこから目にとまる変化を表現する、このような差異として提示することも可能であろう。

両者の差異は単に研究手法の違いにとどまらない。ポストモダン文化人類学が「本物の文化」・「正しい文化」といった物言いに冷ややかな態度を示し、構築主義的な立場から本質主義を退ける反面、中国文化史は個々の文化要素を静的に、そして固定的にとらえがちであることから、ともすれば本質主義的な文化把握に陥りかねない危険性すら持ち合わせている、そのような対比として理解することすらできる。

無論、このような文化史のあり方が歴史学全体の中で大勢を誇っているわけではない。例えば、「新しい文化史」は文化の捉え方として注目すべき動きであるが、これについてはイギリスの文化史家ピーター・バークがうまく取りまとめている。バークはその著作『文化史とは何か』にてヤコブ・ブルクハルトやヨハン・ホイジンガに始まる文化史の潮流を踏まえた上で、それを乗り越えるものとして「新しい文化史」に言及する³。そこでは文化の範囲に民衆文化をも取り込み、かつ扱うトピックには表象や物質文化・身体などを含ませる、そのような研究対象の拡大がなされた点に特徴の1つがある。そして、それらを論じる際の軸となる理論へも関心が強く寄せられ、ミシェル・フーコーやピエール・ブルデューなどの理論家に対する重視はもとより、現実を構築されていくものとして捉える構築主義に影響を受けた点にもまた特徴が求められる。

以上の内容を持つ「新しい文化史」が文化の捉え方として重視すべきものであることは言を俟たないが、これに加えてバークの仕事として触れておきたいのは文化の持つ性質に迫った『文化のハイブリディティ』である⁴。

バークは文学・音楽・建築・宗教など様々な文化の領域に目を配りつつ、文化的遭遇の中で生じる異種混淆性の分析を行っている。そこでは豊富な事例をもとに文化の相互作用が生じる際の状況や境遇の差に応じた対応・反応の様々なパターン、あるいはその結果として生じる影響が示されており、私たちは均質的・固定的といった形容からは程遠いところに位置づけられる文化の姿を目にすることができる。すなわち、本書においては、文化史に基づく知見が優れた文化理論への昇華を果たしていると言えよう。

以上のように文化の捉え方は研究分野ごとに温度差がある⁵。ただ、その温度差は文化理解のあり方

2 このような状況の中、『中国近代文化史研究』（岡山大学文学部、2011）を始めとした遊佐の一連の成果は「文化史」の位置づけや研究手法について強く意識した研究として貴重なものであると言える。

3 ピーター・バーク『文化史とは何か（増補改訂版）』（法政大学出版局、2010）。

4 ピーター・バーク『文化のハイブリディティ』（法政大学出版局、2012）。

5 無論、それは極度に一般化してはならない。中国史研究の中にも上記遊佐の研究やジェンダー・宗教などを扱った研究には「新しい文化史」を意識した研究が一定数存するし、西洋史の分野においても文化の動きに鈍感な「文化史」

だけに限定されない。そもそも文化の扱い方からして分野に応じて異なってくる。試みに事典の項目に目を通してみるとよい。

例えば、石川栄吉ほか編『文化人類学事典』では「文化」の項目が設けられ⁶、日本文化人類学編『文化人類学事典』は「文化の概念」という項目のもと6ページにわたって文化にまつわる説明が加えられている⁷。一方、尾形勇ほか編『歴史学事典』は全15冊からなる大部の事典ではあるが、「文化」が独立した項目として設けられることはない⁸。

この傾向は個別の研究についても同様に見受けられる。「文化史」を名乗る研究が、「文化」に対してそれがどのような存在か定義することは稀と言ってよい。

このような現象が生じるのも、日本の歴史学において「文化」が改めて定義するまでもない自明の存在として扱われているからであろう。個々の文化的事象は研究対象となりえても、その大本たる「文化」概念そのものに対する関心は薄い。文化人類学やパークが取り扱う文化の変化や外部からの要素との混淆といった文化の性質に鈍感な研究がそこかしこに見受けられるのもそうした感覚が背景となっているからかもしれない。佐藤健二・吉見俊哉は文化を対象とする社会学の研究において生じる失敗として「個別の具体的な文化現象の記述への埋没」を挙げるが⁹、これはまさに歴史学（特に中国文化史）における文化研究に合致する指摘である。

ともあれ、「文化とはどのようなものか」を問う捉え方の姿勢、文化の扱い方に見られる親疎の程度、これらが研究分野の間に、あるいは研究分野の内部に温度差を伴いつつ生じていることは確かなことである。冒頭にて述べたように「難しさ」は、単に「文化」という概念を問う難しさだけにとどまらない。それは、それぞれの研究分野、個々の研究者の中で築き上げられてきた文化の捉え方、文化への接し方の差異が、分野を超えたコミュニケーションにとっての障害となる現状をも指し示している。

上述の研究班「東アジアにおける東西文明の出会い或いは衝突」を引き継いで今年度から発足した研究班「アジア圏における文化の生成・受容・変容」では、こうした分野間の差異を前提とした上で、お互いの間でいかなるコミュニケーションが可能か、そしてそこからいかなる文化理解が可能かを問い続けていきたい。それは文学・芸能・美術・思想・食文化と全く異なる研究分野を専攻する者の間でなされる「文化」をめぐる対話ということになるが、その際、当然ポストモダン人類学やパークらの形成してきた知見を意識しつつ可変的な文化の姿を炙りだしていくこととする。

タイトルに「生成」・「受容」・「変容」の語を加えたのはこうした意図に基づくものである。あるいは、このような研究は「陳腐な」・「古臭い」と形容されるかもしれない。少なくとも本稿で論じている内容は、文化人類学・カルチュラルスタディーズ・文化社会学などの研究分野においてはいたってありふれたものであることは間違いない。ただ、ここはパークの文章を引用することで指摘への回答に代えたい。

すでに指摘したように、思想史においては、車輪（新たな発明・発見）はしばしば再発見される。つまり、ある問題について、またはある学問分野で仕事をする学者が、べつの問題に取り組んだり、べつの学問分野にいたりする学者には長年知られてきた現象を、新たに発見するということがあるのだ¹⁰。

多様な分野に属するメンバーの中でなされる対話から文化に対していかなる理解が生まれ、いかなる車輪が再発見されるのか、研究班の一員として期待を寄せるところである。

（なかばやし ひろかず 所員 神奈川大学外国語学部准教授）

は目につく。

6 石川栄吉ほか編『文化人類学事典』（弘文堂、1987）。

7 日本文化人類学会編『文化人類学事典』（丸善、2009）。

8 尾形勇ほか編『歴史学事典』（弘文堂、1994-2009）。

9 佐藤健二・吉見俊哉「文化へのまなざし」（佐藤健二・吉見俊哉編『文化の社会学』有斐閣、2007）、9ページ。

10 注4前掲書、57ページ。